

東方勿忘草 1

雪菜@少年は紅い月に嗤う

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

霊夢と魔理沙の寺子屋時代の昔話。

魔理沙がなぜ努力するのか。負けず嫌いだったからだ。

魔理沙が幼い時に神童と周りが絶賛した男、蓮とは。

完全に没ネタのオリジナルストーリーです。短編になるつもりです。

目次

第1話

初めて書くので至らない所も多いですが気にしないで読んでくださいますか！

これは私のこれから書くだろうオリジナル作品のちよつとした裏話（没ネタ）になります。オリジナル作品はちよつと長めなので：気が滅入らないように頑張っていけます

真夏の太陽がガラガラと照りつける。あまりの暑さにうちわを家から持ってきてよかつたなと思う。いや、うちわが無かつたら暑さで溶けてたはず。あの、氷の妖精のチルノでも日焼けして元気そうなのに…

「なあ、霊夢うあついく。」

「魔理沙…、暑いって言ったらもつと暑くなるでしょ。寒いって言うときなさい。」

ここは博麗神社。霊夢と私は幼なじみでよく一緒に行動している。といつても異変解決とかそういうのは全然、一緒に行動するとかないのだが。

日陰にいるのに真夏というものは私たちの色んなやる気を削がせるほど暑いらしい。博麗神社の縁側、そこに私たちはいた。今日は珍しく私以外の客はいなかった。霊夢は暑そうに顔をしかめながら座り、私は寝っ転がりながらうちわで仰いでいた。

「寒いく暑いく」

「ちよつと魔理沙！暑いって言うだけなら帰ってくれない!?!私も暑いよー!」

「えー、あつ、霊夢、賽銭入れてきたから別にいいだろ?」

「どうぞ、いつまでもここにいらつしやってください。」

ほんと、霊夢はお賽銭の事になるとチョロイわw隠れて私はガッツ

ポーズをする。

そう思うと次は霊夢が口を開いた。

「そういや、紅魔館から苦情が入ったんだけど。魔理沙に本を返させるようにって。」

そのとき、私の頭に1人のドアノブカバーが浮き出てきた。それは「パチュリーか。」

「パチュリーよ。で、疑問に思ってたんだけど、ね、魔理沙。」

霊夢は神妙な面持ちになってかこちらを見つめる。

「どうして返さないのっていうのではないんだけど…、何のためにそこまで魔導書を借りて勉強する必要があるの？魔理沙は充分、独学でもここまで強くなったわ、それなのになんでこれ以上強くなろうと思うの？」

真面目な顔で霊夢が聞く。私はなんて答えればいいのかわからなくなかった。でもとりあえず何か言わなきゃいけないなって思っ

て、「そ、そう！私、魅魔様の弟子だろ!?だから、強くなくちゃ…」

「私の憶測なんだけどね。」

私の言葉を遮って霊夢は言う。

「あんたは負けず嫌いだから、アイツのこと気にしてるんじゃないかと思っ

て。…私は少し黙った。確かにアイツに勝つために私は魔法を勉強していたのだ。アイツは神童と呼ばれるほどの天才だったから。

そして霊夢は口を開く

「でもね、魔理沙、アイツは」

「幻想郷を捨てたのよ。」